環境システム研究　Vol.23　1995年8月

琵琶湖周辺の伝統的道路空間の景観特性に関する一考察

A study of landscape-trait about traditional roadscapes around Lake Biwa

三和啓司*
Keiji Miwa*

ABSTRACT:Since olden times, the area around Lake Biwa has prospered as an important transportation center, with many people constantly travelling through it. The area's gorgeous scenery has been passed on from generation to generation and never fails to enchant those who are lucky enough to view it.

This study looks at traditional roadscapes that confront Lake Biwa, classifying them according to their landscape type while comparing them to existeing landscapes in an attempt to plan new roadscapes that will take into account the enchanting view.

The results show that there are many traditional roadscapes in the Otsu area. These traditional roadscapes are generally enclosed by mountains or point toward Lake Biwa, and so we see that in recent years, construction of lakeside roads has led to the development of new types of roadscapes.
KEYWORDS: TRADITIONAL ROADSCAPES, LAKE BIWA

1．はじめに

琵琶湖周辺は、古くから交通の要衝として栄え、多くの人々が行き交った地域でもある。そしてその美しい風景は、多くの人々に愛され、受け継がれてきている。

本研究は、琵琶湖を望む伝統的な道路（街道）空間について、景観タイプを整理しながら、その特性を明らかにし、今後の道路景観計画の示唆を得ようとするものである。

2．伝統的道路空間の特性

琵琶湖周辺の伝統的な景観を描いた作品として最も有名なものは、安藤広重(1757-1858)による浮世絵「近江八景」であろう。この広重の「近江八景」は、江戸時代末期のものであるが、近江八景としては室町時代の明応9年(1500)、時の関白近衛政家が中国最大の湖である洞庭湖の瀟湘八景にならって選び出したのがはじめといわれている。「滋賀縣史」[1]には、「その最初は必ずしも琵琶湖沿岸ではなかったのであるが、然し室町時代以降、詩僧多く湖国に逃避して乱世に安居するに及

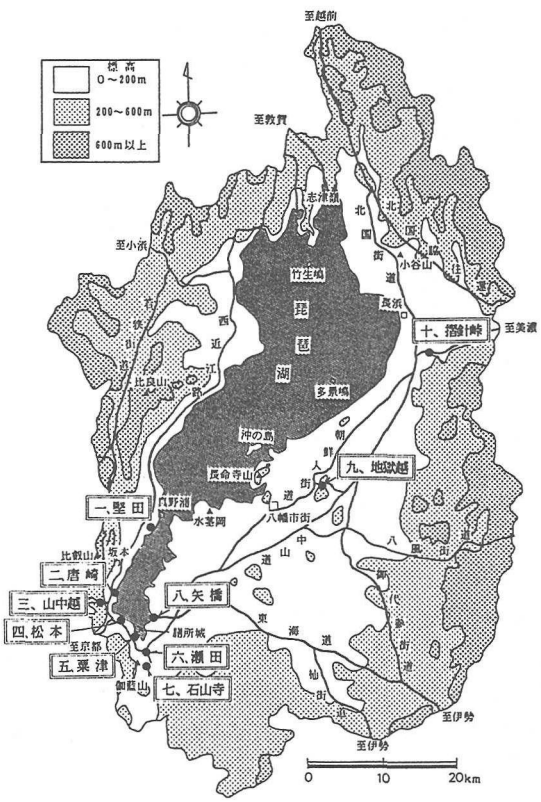


図1・1　伝統的道路空間の位置

＊滋賀県土木部道路課　Shiga Prefectural Office , Road Management Division

び、その湖涯の景趣は宛然として瀟湘を思はしむるものがあり、遂にいつとはなしに八景を定めて長くその名をなさしむるに至った。」と近江八景の成立過程について述べている。

江戸時代に入り、水陸交通が発達し、旅人の往来が頻繁になるにつれて街道も賑わいをみせ、名所旧跡を紹介したいわゆる「名所図会」が数多く出版されるようになった。文化11年(1814)に発行された「近江名所図会」[2)]は、東海道、西近江路、中山道を中心に当時既刊の「伊勢参宮名所図会」「木曾路名所図会」「二十四輩巡拝図会」の３書から近江に流用できる版本を流用してつくられたものである。そして天保年間以降、安藤広重の「東海道五十三次」「近江八景」といった浮世絵風景画が世に出ることとなるのである。

本研究では、上記で紹介した文献等を参考に、琵琶湖周辺の伝統的景観の中でも街路空間、あるいは湖と結びついた景観に着目して整理・分析を行った。

抽出した景観は次の10景観である。

一、堅田　　大津市本堅田
二、唐崎　　大津市唐崎
三、山中越　　大津市山中町
四、松本　　大津市松本、石場
五、粟津　　大津市膳所、中の内町
　　本丸町等
六、瀬田　　大津市唐橋町～
　　同市瀬田
七、石山寺　　大津市石山寺
八、矢橋　　草津市矢橋町
九、地獄越　　神崎郡五個荘町石馬寺～同郡能登川町北須田
十、摺針峠　　彦根市中山町摺針

位置を図１・１に示す。

大津周辺に多く抽出された。

次に、抽出した伝統的空間を概観する。

一、堅田

近江八景のうちの一つ。「堅田の落雁」。

近江名所図会（以下単に「図会」という）には、「坂本より北の方、衣川を渡りて湖の四丁ばかりに堅田の浦あり、これまた八景の中に備わり、景色いはん方なし」と記されている。

二、唐崎

近江八景のうちの一つ。「唐崎の夜雨」

湖岸に一つそびえる松は、街道沿いのランドマークとなっていたと考えられ、古来から人々に親しまれてきた。図会には、「名所　唐崎孤松：今繁茂する所、南北三十八間、東西三十間、枝々のこらず四方に垂れたり、古歌数多あり、一々挙ぐるにいとまあらず」と記されている。

三、山中越

京白川より南滋賀へと抜ける山道。大津の町や琵琶湖の俯瞰景はもちろん、京の町も遙かに望める眺望の絶勝地。

峠の山道は曲がる度に表情を変え、美しいパノラマを見せてくれる。

この道は志賀山越といわれ図会に「志賀山越：桜花多し、今に至ってかわらず、この山の岑より東は湖水、三井寺、大津西は白川、洛中、西山まで、眺望の絶勝なり」とある。

四、松本

逢坂より大津に入った旅人は、京町通を抜けこの松本の渡船場で琵琶湖を初めて目にする。そのためここは「打出の浜」とも呼ばれていた。

周囲には蔵屋敷が建ち並び、そこを抜けて琵琶湖へ「打ち出る」空間であり、矢橋への渡し船も往来し、多くの人で賑わった所でもある。

図会には「石場」の地名で紹介され、「矢橋の渡舟この所に着く、琵琶湖眺望の佳境なり」とある。東海道名所図会には「松本の渡口場」としてそのようすが記されている。

五、粟津

近江八景のうちの一つ。「粟津の晴嵐」

入り江状の湖を見ながら、東海道は松並木をしたがえ屈曲する。

湖上を行き交う帆掛船、浮島状の膳所の城、その白壁、吹き渡る風。

粟津周辺粟津原は、近江八景の一つに挙げられ、多くの旅人が往来した風光明媚な空間である。

六、瀬田

近江八景のうちの一つ。「瀬田の夕照」

東海道を京より下り、粟津原を過ぎると鳥居川の町並みに入る。そこを越えると視界は開け瀬田の唐橋が目にはいる。左は琵琶湖、右は瀬田川。

まず長さ27間の小橋を渡り中島へ、さらに97間の大橋を渡って勢田の町並みへとはいる。

橋の景観のすばらしさに加え、橋を渡り視界両側に水辺空間の広がる風景もまた美しいものであったと思われる。

七、石山寺

近江八景のうちの一つ。「石山の秋月」

山門前は川筋が大きく蛇行し、特徴的な景観である。

石山寺は近江八景に見られるように月の名所として知られるが、またこのあたり一帯は、蛍の名所としても知られる所であった。

八、矢橋

近江八景のうちの一つ。「矢橋の帰帆」。

東海道の分岐を矢橋街道に入る

図会に「絶景いはん方なし、膳所の城は布を長く敷きたるがごとく、南はせたの橋はるばると見わたし、その余湖辺の眺望ここにおいて一変す」とある。

九、地獄越

中山道から朝鮮人街道へと抜ける道。中山道側から石馬寺の集落を通って山道に入り、峠を越え北須田の集落から朝鮮人街道へと至る行程が「地獄越え」と呼ばれる。

湖や、山々の眺望はすばらしく、図絵に「この嶺より見おろせば、安土山の麓より湖水ようようとして、眼下に八幡の市中・長命寺山・水茎岡・多景嶋遙かにむかふを見れば、唐崎の松・坂本・比叡山・比良の高根あるいは堅田・真野浦をゆきかふ船、または渚にあさる千鳥の声、有明の月明けらく、いさりする海士のしわざまで鮮やかに見えて、淡海一州の風景の地なるべし」と記されている。

十、摺針峠

中山道番場宿から山越えで鳥居本宿至る道。中山道を木曾、美濃方面から京へ向かう時、深い山道を抜けて初めて琵琶湖の姿を目にする空間である。

このあたりは北国街道、朝鮮人街道との分岐点も近く交通の結節点に位置している。

摺針峠には「望湖堂」と称す茶店があり、ここからの琵琶湖を中心とする眺めは中山道随一といわれた。図会に「この茶店より見下ろせば、眼下に磯崎・筑摩祠・朝妻里・長浜、はるかに向ふを見れば竹生嶋・お

きの嶋・多景嶋、北には小谷・志津嶺鮮やかに遮りて、湖水洋々たる中にゆきかふ船見えて、風景も美観なり」とある。

3．伝統的道路空間と景観分類

1では、伝統的道路空間として10景観を概観しその特性をみたが、これらの景観は、地形上の特性から大まかに次のように分けることができる。

Ⅰ．峠からの景観

（三.山中越、九.地獄越、十.摺針峠）

ダイナミック、パノラミックな俯瞰景観。遠望。

Ⅱ．港からの景観

（四.松本、八.矢橋）

集落を抜けると港と湖が広がる。人の賑わい。

Ⅲ．沿道沿いの景観1

（五.粟津、七.石山寺）

街道に沿って琵琶湖を含んだ調和のある風景が広がる空間。

Ⅳ．沿道沿いの景観2

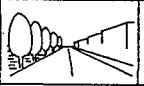
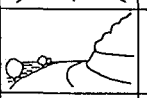
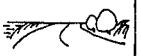
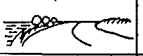
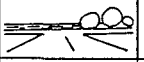
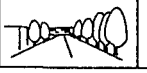
（一.堅田、二.唐崎）

街道から琵琶湖に直角方向にアプローチし、琵琶湖とランドマーク（浮御堂・松）の調和のある風景が広がる空間。

Ⅴ．橋からの景観（六.瀬田）

湖の中に視点をおいて、風景を眺めることができる空間。

表2・1　琵琶湖周辺の道路景観分類と特徴（田島らによる(1992)）

景観分類	景観モデル	分類の特徴
分類1 湖岸・並木道		・湖岸に連続した植樹帯がみられ、植樹帯越しに湖が見える ・市街地に多い
分類2 直線・半開放		・道路線形は直線 ・一方は山、一方は大きく視界が開け湖を望む景観
分類3 ｶｰﾌﾞ・囲まれ		・道路線形はカーブ ・主に一方向を山で囲まれ、湖岸に緑地がある ・琵琶湖北部に多くみられる
分類4 ｶｰﾌﾞ・開放・緑地		・道路線形はカーブで湖岸を走る景観 ・開放的で視点場付近に緑地帯がみられる。
分類5 ｶｰﾌﾞ・開放		・道路線形はカーブで湖岸を走る景観 ・分類4よりさらに開放的な景観
分類6 橋　梁		・橋梁から湖を望む景観 ・湖は主として欄干越しに見える
分類7 直線・開放・直角アクセス		・道路線形は直線で湖を正面に見る ・視点場周辺は開放的な空間
分類8 直線・囲まれ・直角アクセス		・道路線形は直線で湖を正面に見る ・視点場付近を緑地や建物で囲まれた景観

田島らの研究[3]による湖畔景観の分類は、景観の骨格・構図の違いによって分類されたものであり、上記の伝統的道路空間をこの分類にあてはめることができる。

田島らの景観分類を表2・1示す。

この特徴を次の5つの景観要素によって整理したのが表2・2である

1．囲まれ度　　（両側・片側等）
2．囲まれ度の構成要素（山・集落等）
3．道路線形　　（直線・カーブ等）
4．湖の見える方向　（正面・側面）
5．湖までの距離　　（中近距離・遠距離等）

また、この5要素をもとに伝統的道路空間の景観特性をまとめたものが次の表2・3である。

この2つの表をもとに伝統的道路空間と景観分類を関連させて考察する。

表２・２　景観分類の特性

景観分類	囲まれ度	囲まれ度の構成要素	道路線形	湖の見える方向	湖までの距離
分類１	両　側	並木等	直線	側面	中・近距離
分類２	片　側	山	直線	側面	全距離景
分類３	片　側	山	カーブ	側面	中・近距離
分類４	開放的	なし	カーブ	側面	中・近距離
分類５	開放的	なし	カーブ	側面	中・近距離
分類６	開放的	なし	直線	両側	全距離景
分類７	開放的	なし	直線	正面	中・近距離
分類８	両　側	集落・山等	直線	正面	全距離景

表２・３　伝統的道路空間の景観特性

景観名	囲まれ度	囲まれ度の構成要素	道路線形	湖の見える方向	湖までの距離
一.堅田	両　側	集落・松	直線	正面	中・近距離
二.唐崎	両　側	集落・松	直線	正面	中・近距離
三.山中越	両　側	山	直線・カーブ	正面	遠距離
四.松本	両側→開放	集落→なし	直線	正面	中・近距離
五.粟津	片　側	並木	直線・カーブ	側面	中・近距離
六.瀬田	両側→開放	集落→なし	直線	両側	全距離景
七.石山寺	片　側	山	カーブ	側面	中・近距離
八.矢橋	両側→開放	集落→なし	直線	正面	中・近距離
九.地獄越	両　側	山	直線・カーブ	正面	遠距離
十.摺針峠	両　側	山	直線・カーブ	正面	遠距離

●一.堅田、二.唐崎、三.山中越、九.地獄越、十.摺針峠　＝　〈分類８〉

両側を囲まれ正面に湖を見る景観は、景観分類としては分類８と最も対応していると考えられる。

この中には集落内から湖に抜けて間近に湖を見る一.堅田、二.唐崎のタイプと、峠から遠望で琵琶湖を望む三.山中越、九.地獄越、十.摺針峠の二つのタイプに分けられる。

●四.松本、八.矢橋　＝　〈分類７〉

この２景観は、港へのアプローチを含む空間であり、Ⅱ港からの景観として整理した。その方向は湖に正面方向であり、手前は町並みによって囲まれているが、港に抜けると開放的な空間が広がる場所である。

湖を正面にみる分類は分類７と８である。分類８にも近い景観といえるが、港での広がりをもった湖畔景観であることを　重視してここでは、現代空間の分類７と対応させるものとした。

●五.粟津　＝　〈分類１〉

街道沿いの並木に特徴があり、分類１と対応させるものとした。

表２・４　伝統的道路空間と景観分類

景観分類	景　観　特　性	対応する伝統的道路空間
分類１	湖岸・並木道	五.粟津
分類２	直線・半開放	――――
分類３	ｶｰﾌﾞ・囲まれ	七.石山寺
分類４	ｶｰﾌﾞ・開放・緑地	――――
分類５	ｶｰﾌﾞ・開放	――――
分類６	橋梁	六.瀬田
分類７	直線・開放・直角ｱｸｾｽ	四.松本　八.矢橋
分類８	直線・囲まれ・直角ｱｸｾｽ	一.堅田　二.唐崎 三.山中越　九.地獄越 十.摺針峠

●六.瀬田　＝　〈分類６〉

橋梁景観として特徴があり、分類６と対応させるものとした。

●七.石山寺　＝　〈分類３〉

湖畔に沿って屈曲して街道が続き、片側を山で囲まれた景観は、景観分類の３と対応させるものとした。

以上の考察の結果を表２・４にまとめて示す。

４．ま　と　め

本考察の結果、琵琶湖を目にする代表的な伝統的道路空間の特徴として

①大津周辺に偏って抽出される。

②ルートとして、湖に直角にアプローチし、比較的囲まれ感のある景観が多い。

この囲まれ感についてさらにみると、山が湖に迫っているという大津周辺の地形上の特性から囲まれ感をもつ三、山中越と七、石山寺のタイプと、交通の拠点として繁栄していた大津の町並み等建物によって囲まれ感をもつ一、堅田、二、唐崎、四、松本、八、矢橋の大きく二つに分けられる。

また、わずかに湖東部で抽出された九、地獄越、十、摺針峠の両景観とも、山に囲まれ、峠から湖を見おろすという分類８の中でも特に三、山中越に近い囲まれ感を持った空間として対応づけられた。

③現在の琵琶湖を目にする道路空間と比べ景観のタイプが少ない。

特に湖畔部の開放的な景観をもつ道路空間は比較的近年に整備された。

ことがわかった。

５．お　わ　り　に　～今後の道路景観整備に向けて～

近年の湖岸道路整備によって、湖岸自体の風景は一変することとなった。湖岸道路は自然破壊、景観破壊という見方が一方ではあるが、今回の考察から湖岸道路が出来たからこそ一般の人々が湖の様々な表情を身近に目にする機会が増え、その景観のバリエーションも豊富になり、その地域分布も広がりを持つようになったことがわかった。

また、今回峠越えの景観が三箇所抽出されたが、これは山道を越え峠にたどりついた旅人の目に、琵琶湖がより印象的に映ったことが一因ではないかと感じた。現代人が車を運転していて風景から得られる感動と、往時の人々のそれとは感じる側の感動の「質」がどうやら変わってきているように感じられる。

いずれにしても、本考察により、「豊かな景観をもつ空間を提供する」という視点で道路整備をとらえた場合に、湖岸道路をはじめとする道路の整備が大きな意味を持っていることに改めて気付くとともに、今後は意識的に湖を「見せる」また「感じてもらう」演出を検討することが必要であると強く感じた。

参考文献・資料

１）滋賀縣　編著：「滋賀縣史　第三巻　中世ー近世」　清文堂出版　（1972）

２）永野　仁　編：「日本名所風俗図会11　近畿の巻Ⅰ」　角川書店　（1981）

上記掲載の「近江名所図会」文化11年（1814）を参考とした

３）田島　學、三和啓司：「琵琶湖への導入空間における景観特性に関する基礎的研究」

第27回日本都市計画学会学術研究発表会論文集（1992）PP727ー732